
戦国少女

亜紀内 司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦国少女

【Nコード】

N7160X

【作者名】

亜紀内 司

【あらすじ】

時は江戸

。浅川家第8将軍が住む坂兎城の庭番の少女は、今日も夜を駆け抜ける。

姫と庭番（前書き）

この作品は実際の団体、歴史の流れ、歴史上の人物とは一切関係ありません。

姫と庭番

深夜の静まり返った江戸の町に、無数の足音が響き渡る。

「いたぞーっ！捕まえるー！！」

袴の擦れる音と刀の揺れる音がやけに五月蠅く感じるのと言つまでもない。

彼等が追っているのは1つの影。

それは、お庭番と呼ばれる存在

忍者だ。

「あははっ！遅い遅い！ちよろいな！」

影は高笑いをしながら、民家の屋根から屋根へと飛び打つる。

お庭番としてはあまりにも派手な行動…いや、発言だが影は特に何も思わない。

しばらくして追っ手の音がなくなると、影は急にピタリと止まり路地裏へ飛び降りる。

「ここまで撒けば、もう来ないな。はあー…疲れたなあ…」
やれやれと言った風に首を回す。

「あ、そうだ！早く里志さとしに報告しなきゃっ」
急に何かを思い出したようにはっ、と顔を上げると、自らが戻る城に帰ろうとする。

しかし

「はあー…。まさか浅川あさかわ家の庭番が女だったとは…」

上から声がしたかと思うと、両腕を右手で捕まれ、羽交い絞めにされる。

「……………っ！お前はっ！華党家の庭番か…！！」
さつきまで緩み切っていた表情が一気に硬くなる。

「離せっ！！！消え失せるこの屑野郎っ！」

浅川家の庭番、浅川^{あさかわ}里美^{さとみ}は女とは思えない発言をした。

自分の状況下を分かっているのか分かっていないのか…あまりにも態度がデカイ。

「…あのさ、お前、自分の今の状況分かってる？」

華党家の庭番は少々呆れる。

「とにかくっ！私を離せっ！」

そう言いながら里美は隠し持っていた煙玉（睡眠薬入り）を身体をくねらせ落とす。

「うわっ！！」

流石にいきなりの事に驚いたのか、華党家の庭番の手が緩む。

「隙ありっ！」

そんなセリフ言わずにさつきと両腕を抜いたほうが早いとは思っただが、里美は言いながら両腕を抜いた。

「せこい…なんて女だ…」

「女なんて庭番始めたときからとっくに捨ててるっっの…！！」

煙の届かない場所に移動しながら舌を出す。

「うわっ！最低だな？！女の言う事か？」

「五月蠅いなあ…。そんなモン私の自由だろうっ」

庭番はお互いに干渉してはいけない。

この二人はその掟を忘れてるらしい……………。
いや、覚えていたとして、完璧に無視している。

「アンタ面白いなあ！オレあ弥甲^{やいひ}陽^{やう}一っっんだ！アンタは？」

「は？うーん…私はだなあ……」

彼女が本名を口走りそうになった時、遠くから追っ手の足音がした。

「あー…また今度なっ！見逃してくれてどーも陽一さん？」

里美はそういうと、一瞬でその場から立ち去った。

彼女がいなくなると、華党家のお庭番、陽一は夜空を見上げた。

その瞳は、さっきまでとは打って変わって冷徹そのものだ。

「……………あれが、浅川家の姫…ねえ……」

彼の呟きは、夜風に吹かれて、消えた。

姫と庭番（後書き）

どこかでクスリ、とでもアハハとでも笑っていただけると嬉しいです*

ジャンルは恋愛ですが、自分的にはコメディーを主にしたいなあと思っています。

文がおかしいのは目を瞑ってやってください（）

浅川の人間（前書き）

前回までのあらすじ

浅川家の庭番である、浅川里美は姓を見れば分かるとおり、浅川家の姫だった。

浅川の人間

一仕事終えた、浅川あさかわの庭番、里美さとみは夜の町を徘徊していた。

さつきまで、城に戻ろうとしていたようだが、気が変わったらしい。今の季節、夜はかなり冷え込むが、桜がもう満開だ。

夜桜と言つのも風流があつていいだろう。

「はあー」

丁度桜の木の近くにあった石に腰をかけると、ゆっくりと空を見上げる。

ひらひらと、程好い速さで散っていく桜の花弁はなびは、儂く、美しい。

そのうちの一枚をタイミングよく右手で掴むと、そっと手を開く。

花弁の薄桃色は昔彼女の好きだった色だ。

里志りし怒るかなあ……

その花弁を見つめながら考えに耽ふける。

まあ今日は独断で勝手に行動しちゃったし流石に怒るな……。なんで弁解しよう……。里志、私が嘘付いてもすぐ見抜くんだよなあ

……！！

悶々と考えていると急に肩に布のようなものが落ちてきた。

バツ、とそちらを振り返ると、同じ年で同じ庭番の狭は巳み 雅也まがいた。

どうもこの少年は苦手だ。
いつも無表情極まりない。

「……さとみさま…なぜ…ひく」

「うん。雅也、ありがとう。…どうしてここが分かったの？」

一番疑問だったことを言う。

「さとみさま…きつと…」

話にくい。

何故、言葉と言葉の間を置く………！

そして何故、単語なんだ…！文で話してくれ…！！！！！！！！

内心でそう叫びつつ、「そ、そうなのか…」と、もう既に里志にバ
していることに落胆し、肩を落とす。

「とりあえず…かえりましょう。さとみさま…しんぱい…してます」
確かに、ここで彼と話していても埒が明かない。

「そうだな！帰るか！」

潔くそういつと、二つの影が江戸の町に消えた。

〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃

「庭番、里美、ただいま戻りました」

目の前にいる自らの弟、淺川家8代目將軍である淺川 里志に片膝
を付き恭しく頭を垂れる。

「どこに行ってた？」

やばい、完璧に怒ってるな…。

声の低さからそう感じとりながら、里美は次の言葉を考える。

「…敵である華党家の視察に……」

正直に述べる。

「そうか」

里志はそう一言告げた。

あれ？やけに簡単に終わった？

やった！と里美が思ったのも束の間の事。

「……………だけでこの僕が許すとお思いで？姉上」

ダメだった。

浅川の人間（後書き）

最初は里志の性格、シヨタ系（？）（wにしようと思っていたのですが、ちよっと変更なのですよww

Sですね。シンデレ…かどうかはまだwww

『白鬼戦将軍』と呼ばれる少年（前書き）

自らの弟、浅川家第8将軍 浅川 里志に呼び出された里美。
果たして、彼女は里志の説教から逃れる事はできるのか…？

…前書きからしてなんかギャグっぽいのは気のせいですか…きつと…。

『白鬼戦將軍』と呼ばれる少年

「いや…その…少しでも里志様のお役に立とうと…」
広い広間に浅川家の庭番の声だけが響く。

弟の機嫌を少しでも直そうと試みる里美。

頭を下げているので、里志からは見えないが、目が完全に泳いでいる。

「僕は姉上がお庭番の第1部隊隊長になる事自体反対だったので、それをここにいる馬鹿小姓…ではなかったな…佑助ゆうすけによって、嫌々任命しました。それは姉上も承知のはず」
自らの弟に説教をされる姉。

さぞかし滑稽な光景だが、將軍と庭番（…いや、本当は姫なのだが…）の立場を考えれば別におかしくもない。

「それをなんですか…。佑助は“隊長は部下を使ってどっしり構えていれば良いのですから、里美様が働く立場にはなりませんよ”などと言っていたのに実際どうです姉上？聞くところによると、いつもいつも…“巡回”など言っては江戸の町を堪能して来ているよ…うで……」

浅川家8代目將軍の説教は全く先が見えない。

「この間、姉上の侍女が隠し戸を見つけて、姉上が江戸の町で買った物がいろいろと出てきたようですが。どう弁解しますか？」

（げっ……、紗子さこの奴チクったな…）

頭上で流れる説教を聞き流しながら、いつも身の回りの世話をしてくれる侍女の顔を思い出す。

「ああ、余談ですが姉上、紗子は僕になにも告げ口などしていません

んよ。僕にそれを教えたのは、丁度その場面を見てしまった、ここに
いる佑助です」

…読まれていた。

「それで？姉上、なにか僕に言いたい事はありますか？」

「……………」

この後、里志の説教があげばのまで続いたのは言うまでもない。

）
）
）
）
）
）
）
）
）
）
）
）

ここで、里美姫の弟、つまり淺川家8代目将軍である、淺川 里
志について触れてみようと思う。

両親はある事件に巻き込まれ他界し、弱冠10歳で“将軍”という
地位についた彼は、今年で16になる。

彼は唯一の血の繋がりがある姉を大切に思っており、実はかなりの
過保護だ。

無茶苦茶に見えて、彼の合理的な策は誰でも思いつくものではなく、
数々の名のある将軍達を踏み潰してきた。

そのおかげで今まで全くと言っていいほど黒星がない。

そんな彼についた名は『白戦鬼将軍』^{はくせんき}。

どんな戦いでも白星を獲る将軍、という意味らしい。

何故鬼が付くかといったら、きつと彼の性格にあるのだろう…。

そんな彼が今、攻略に苦戦しているのが華党家だ。華党家の12代目將軍は、里志と同じ頭腦派らしく、淺川家とほぼ互角だ。

まだ戦争は、していないものの、淺川家と華党家がぶつかれば、多くの被害は免れない。

農民までもを氣遣う里志の性格が、人望が厚い理由の一つとも言えるだろう。

淺川 里志とはそういう男だ。

）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）
）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）

「あー…疲れた…そして…眠い…」

里美はそう呟きながら自らの部屋へと向かう。

そつと襖を開けると、自分に良く似た顔の少女、あきみや秋宮 ちばる千春が待つ
ていた。

彼女は所謂、里美の替え玉だ。

と、言つても里美よりは1つ下の15だが。

「お帰りなさいませ、御姉様」

この里美大好き少女は彼女の事を『御姉様』と言つて慕っている。

「ただいま、千春。何もなかったか？」

高く結つてあつた髪を解きながら、自分にそっくりの彼女を見る。

「特に何も御座いませんでしたわ。あ…：…：…：…：…：…：…：…：…：…：…：…
て“里美様、申し訳ありません”。何故か里美様のコレクションが將軍にはれてしまったらしく、この紗子…：…：…：…：…：…：…：…：…
”と言つておりましたわ」

わざわざ声音を変えながら、嬉々として話す千春。里美と話すのが

よっぽど嬉しいらしい。

「御姉様のコレクションとはなんの事でしょう?」

にっこり、と満面の笑みを浮かべながら、尋ねる千春。

「それは…その…」

“巡回”という名の“江戸満喫作戦”(作戦とも言いがたいが、里美が勝手に命名した)の事を千春に言ったらどうなるかは予想がつかく。

『わぁ!素敵ですわ!私も一度やってみようかしら!!!』
という事になる。

千春は里美よりも、よっぽど“姫”という立場に合っているのだが、里美の率いる浅川家庭番第一部隊の中の一人だ。

つまり忍者であって、城から抜け出すのは容易いことである。

「……その…。…そう!!!今まで城の敷地内で見つけた綺麗な石のコレクション!!!」

普通に考えてこんな言い訳、赤子でも思いつきそうだが里美は特に恥じらいもせずに言い切った。

そして、普通に常識のある人間なら、ここで“仮にも姫がそこらへんの石を集めるか…?”という考えに辿りつくのだが、千春は違ったようだ。

「まあ!素敵ですわね!!!今度私もやってみようかしら!!!」
目を輝かせて、まるで女神でも見ているかのような彼女は、里美に尊敬の眼差しを送る。

彼女には“常識”の“じ”の文字もなかったらしい。

『白鬼戦将軍』と呼ばれる少年（後書き）

文章がぐたぐたなのは毎度のことなのでご勘弁をっ（殴

評価、または感想・アドバイスなどいただけたら泣いて喜びます*

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7160x/>

戦国少女

2011年10月28日02時01分発行